

ることを確信する。

(A5版 四七九頁 図版一四頁 一九
八五年二月 山川出版社 七〇〇円)
(岡村秀典 京都大学助手)

会 告

昭和六〇年度史学研究会大会お
よび総会は、予定通り、十一月二
日(土)午後一時三〇分より楽友
会館において開催されました。
公開講演は中村幹雄、水津一朗
の両氏により左記の演題で行なわ
れ、盛会裡に終わりました。

一九一九年一月ナチ党の成立を
めぐって

——比較ファシズム論の観点から——

中村幹雄氏

日本とヨーロッパの間

水津一朗氏

昭和六〇年度 史学研究大会講演要旨

一九一九年一月ナチ党の
成立をめぐって

——比較ファシズム論の観点から——

中 村 幹 雄

ファシズムとはそれ自体、比較概念なのであって、これは共通の性格をもつ複数のファシズムの存在を前提として成立する概念である。近年、欧米においてはファシズム概念を否認する学説が登場しているが、このような研究は、かえってナチズムやファシズムの個性的認識をさまたげる働きをするものであろう。ナチズムやファシズムを取り扱う場合には、それぞれに独自なものとは何かという問いよりも、ファシズムにおいて独自なものは何かという設問の方を優先させねばならない。本発表の課題は、ナチ党に即してファシズム運動の成立を考察するところにある。

ナチ党、つまり「国民社会主義ドイツ労働者党」(その前身は「ドイツ労働者党」DAP)は、一九一九年一月五日ミュンヘンの労働者ドレクスラーによって創立され、この党には、当初、彼の同僚の労働者二四名が参加する。この「国民社会主義」という構想の出現を考察するにあたっては、第一次世界大戦が従来のような内局戦争Kabinettskriegではなく、民衆が全面的に参加を余儀なくされる歴史上、最初の総力戦という性格をおびていたことを決定的に重視しなければならない。何故なら総力戦は、(一)国民の一体感情を煽りたてて国内の政治的社会的亀裂を押し流しはするものの、他方ではその存在を逆に鋭く自覚させ、(二)民衆に莫大な犠牲・負担を強いることにより、民衆の側にそれへの代償、つまり政治的社会的平等要求を目ざめさせる働きをするからである。国民社会主義構想は、このような総力戦の平準化作用にそれなりに裨として成立する。

ドレクスラーは、大戦中には激情的なナショナリズムにとらわれ、一九一七年九月に「祖国党」が結成されて城内平和と勝利の平和を訴えると、この組織に加入する。だが彼は、その三ヶ月後に、この組織を「民

衆の魂を知らない」と批判して脱退する。

そして彼は、大戦中には市民 Birger と労働者との「団結」「接近」（『国民主義』）を訴えるとともに、これの必要な前提として全体の立場に立って労働者の状態の「高尚化」及び労働者の市民との「同権」（『社会主義』）を要求して活躍する。つまりドレクスラーにおいては、国民主義を強調することは社会主義を実現することであり、また社会主義を達成することは国民主義を完成することを意味していた。従ってこの両者は、国民社会主義という一語にまとめられてくる。ヒトラーは、一九一九年九月中旬、このような意味での国民社会主義理念に共鳴してDAPに入党した。

力の排除に乗り出し、その結果、ハラーは一九二〇年一月DAPから脱退する。ドレクスラーの「祖国党」脱退からハラーの離党までの経過は、「祖国党」や「トゥーレ協会」を牛耳る市民層の指導からのDAPの自立化の動きをあらわしている。つまりDAPは、国民社会主義理念に立脚して、マルクス主義陣営からの労働者の奪還をめざし、かつ労働者を国民の中へ統合する課題を市民層にゆだねずに自ら自身の自立した運動として展開することを意図して出現する。

て触発された激情的ナショナリズムが「生産者」として一体化された「国民」という立場を尖鋭に打ち出す契機となったと考えられる。また「戦士のファッシ」の綱領（一九一九年六月六日）にも労働者の「高尚化」につながる要求がうたわれている。要するにナチズムもファシズムも二〇世紀の総力戦が生み出した激情的なナショナリズムと国内における政治的分裂の自覚化とをふまえて、労働者を国民の中へ組み入れ、それによって国民を新しく再編成する試み、しかもこの課題を市民層や伝統的支配エリートの手から奪取して自ら自身の自立した運動として遂行しようとする試みとして出現したものといえる。

日本とヨーロッパの間

水 津 一 朗

一

日本とヨーロッパとの間の私の履歴は、日本地政学の崩壊とともに始まった。いまどき、なにが日本とヨーロッパだ、という

若い人も少なくない。しかし私などの遍歴当初、ヨーロッパはまだ巨大な存在だった。ヨーロッパ世界の社会文化の発展コースを下敷きにした単系的な歴史発展法則も、なお權威をもっていた。

近代地理学史を嚙るにつれて、私は文化景観、すなわち地表の「形をもつもの」にひかれていった。「社会構成体」が流行した当時、なぜ「形」だ、との批判も多かった。しかし地理学的には、「形」とは空間的ひろがりである。地表上の存在は本来、空間的ひろがりをもつ。身体にも「形」がある。「形」をもつ身体が、身体以外の「形」のあるものを利用して、うまく生きている。家屋も、農地も、交通路も、「身体の延長」としてのはたらきをもつ。「形」と機能は表裏一体である。

昭和二〇年代、私自身にとっても景観の理解はまだ不徹底だったが、とにかく身近かな集落や農地に腰をすえて、Geopacitos（地平和学）に進もうと思った。貧しい戦後、私たちの間ではやったこの言葉は、グリフィス・テラー編『二〇世紀の地理学』（一九五一年）の中で、テラー自身が提唱した造語である。メスエン社から入

った戦後初の大部の原書だった。

二

社会集団がおいてある場所が、「形をもつもの」で構成されているのはいうまでもない。歴史の過程で、その生活空間がどのようにならやまち、グン、クニなどのレベルに編成されていったか。そこに関心を抱く発端は、エミール・デュルケームをはじめとするフランス学派の社会学にあった。彼が『宗教生活の原初形態』を構想したフィールドは、オーストラリア中部のアルンタ族の世界だった。その地方を探検した一九世紀末期のスペンサーとギレンのレポートから、デュルケームは集団生活の古い姿をとらえ、集団の原初形態に溯及した。地理学を志す私は、こうした形態が維持される基盤ともいえるべき原初的な生活空間を掘りだそうとした。親族組織の複雑ないくくみにもかかわらず、ホルド（Jorde）にあたる小領域が、ここでもある程度の完結性をもつて存在した（『社会地理学の基本問題』大明堂刊）。

ところで日本やヨーロッパの古代、史料的におさえる最小の基本的な生活空間は、

郷や Gau あるいは pagus であった。郷や Gau が地理的なひろがりをもつと断定するには、当時のお史学の側には疑点があったが、いまでは歴史地理学的手法をもつて、双方とも図上にはっきり復原できる場合も少なくない。私はこれらを「原基礎地域」とよぶ。規模は近似することがあるにしても、狩猟採集民のホルドが、郷や Gau にどのようなつながるかは、なお不明。

その後の日本とヨーロッパにおける重層的な地域の発展には、大局的にはよく似たところが少なくない。研究の焦点を歴史時代に移して以来、中世の「基礎地域」としてのムラを包みこむ市場圏、グン・クニ・封建領域などの消長だけでなく、ムラを構成する字や Gewann の形成やそれらの機能の究明にあけくれする日々が続く。個別研究を重ねてモデルを仕上げるについては、発表のたびに修正を要する不安がつきまとった（『地域の論理』古今書院刊）。

クニや封建領域が、それぞれ中心から徒歩や騎馬で一日行程の規模をもちやすいことが確認できた反面、中国の省界が日本やヨーロッパには例のない異常な大きさをもち、また第三世界の近代国家が、古代

旧世界の「道」や「プロヴィンキア」レベルのしくみを母胎に成立した場合の少ないことなど、主題からみれば道草のような内容に、かえって関心をひくものが多かった。後日、上述の諸領域の一部にパスカルの原理を適用して、それらが二次曲線に内接する六辺形に対応すると証明できたきっかけも、中国内陸部の省界にあった。

それはともかく、つねに念頭から離れなかったのは、それぞれが要素で構成された各領域の内部構造にはユニークな特徴があるにちがいないということだった。私の多系的発展論は、ここから発足する。

三

古代日本には、直線・方格・等距離などを原則とする条坊制や条里制が大陸から導入され、一種の幾何学的地割が普及する。条里の原型を求めて、数年、古い地形図上に中国の阡陌を詮索したのは道草ではない。ヨーロッパでも、ローマ都市の方格プランとともに、阡陌とよく似た *centuria* が、ローマ帝国の版図内に実施されたことがあるから。しかしこれらは、帝国の崩壊とともに荒廃した。リメスの彼方には、成立し

た痕跡すらない。

古代末期から、日本でも幾何学的プランは乱れてくる。ただし起伏の多い大山庄などの庄園史料にみられる条里のゆがみが、中世の乱れかどうかは、目下断言できない。ただ畿内をはじめ、平野部に集村化がおこったことだけは確実であろう。史学では池田庄や垂水庄における集住が有名だが、歴史地理学でも、空中写真の立体視などを利用して中世集村化の事例研究が進んできた。私も昭和三〇年代後半に、ヨーロッパの集村化 (*Vorfürung*) と対比して、大学の講義や人文地理学会の例会でこのことについて論じ、中世集村の成立を契機に所謂ムラレベルの「基礎地域」が強化され、古代郷の解体が決定的になるとみた。

注目をひくのは、中世村の立地する境域が、条里の坪区画などとはうまく重ならないし、集落の内外を結ぶ交通路も、条里プランに沿う直線道路とはくいちがう場合の多いことである。複雑に道路が折れ曲って、意図的に遠見遮断の機能をおびたように思われることも少なくない。隅ちがいも目につく。家並みも画一的ではない。古代の左右対称がこわれ、精神的な紐帯としての神

社も、集落の片隅に鎮座する。しかも全体にある種の秩序があるのは、なぜだろうか。こうした状況は、中世以降に成立した都市についてもいえる。近世城下町には、古代条坊都市に比べて画一的な方格プランからの逸脱が目立つ。大ブロックごとに、街路の走向がくいちがうことも少なくない。とりわけ、のれんと格子戸のある開放的な町家風景は、封鎖的な条坊の町とは本質的にちがう。

このような古代の幾何学的プランからの変容を、ただちに自然発生的な不規則性への回帰と断定するには無理がある。むしろ、古代とはちがった、もう一つ別の規則性をもつ造形原理が形成されたと考えるべきではあるまいか。

四

私はここで、ヨーロッパのムラやマチの景観変化の特徴をとりだしてみよう必要がある。

ヨーロッパでは、小村状の数戸の農家が、袋小路状の空間 (*Sackgasse*) を不規則にかこんだ村落が古い。その空間からでた道 (*Viehweg*) が、ムラの共有牧地というべき

外マルクまで通じている。マルクの内側には、ブロック状の内農地がひろがる。袋小路状の空間は共同の広場であり、家畜を保護する牧地もあった。一二、三世紀ごろから屋敷が特定の場所に集まると同時に、袋小路状の広場が円形になる。これがエルベ川以東の一部に目立つ円村 (Rundling) である。一般には、広場のゆきづまりにも新しい道が通じて広場村 (Platzdorf) ができる。この広場が円形に整えられると、円形広場村 (Rundplatzdorf) となるが、広場のプランは、円形のほかに正方形や長方形、街路状などローカルに変化する。これらの広場に教会や会所、水洗い場、物見やぐら、処刑場などの公共施設が整うと、Angerdorf の成立となる。ヨーロッパにおける中近世の村落共同体は、このような計画的な集村化を介して強化された。

とにかくヨーロッパ村落の集落形態を調べてみると、ときとともに幾何学的整形化が目立つ。幾何学的な規則性は、エルベ川以東の内陸植民のすずんだところで顕著であるが、以西でも古い不規則な集村や小村に混って、特定の寺領や封建領域ごとに規則正しい広場村や Angerdorf のひろがる

ことも、徐々に判明してきた。Angerdorf は東フランスにも、またミッドランドにも少なくない。

農地形態にも、原初のブロック農地から整形化した紐状農地への発展が、フランクの国家植民以来目立つ。Angerdorf の長地型紐状農地や林地村と湿地村の広幅紐状農地などは、幾何学的プランの典型であろう。また中世三圃農地の各 Gewann ごとにきちんと一筆耕地が並んだ画一性は、小さきままな日本の水田農地とは到底同日に語る事ができない。規則正しい持分配分と作付規制を反映する「太陽分割制」は、かくべつユニークである。

これは私の『ヨーロッパ村落研究』(地人書房刊) の結論の一部である。しかし私が個別研究に没頭していたころ、ドイツでは集落や農地の発展系列について、学説上の転換が進んでいた。所謂 Escherttheorie から Blockertheorie への転換である。昭和四一年春、フランクフルト大学滞在時にクレンツリン教授に同伴できたヒュンフェルト地方の探訪が、新学説の仕上げの時期でもあっただけに、当時クレンツリンの助手だったマッツァート教授が最近、あの前

後の学界事情を回顧しているのが感慨深い。ヨーロッパの市壁で囲まれた中世都市が、一二、三世紀ころから規則正しいプランに再編成されてきたことは、周知のことであろう。すでに一三、四世紀から、街路の直線化や拡張化が次第に各地で企てられた。その完成をあのブロック都市にみることができ。都市プランの幾何学的輪郭が、周辺農村の集落形態に影響した場合も少なくない。

五

要するにヨーロッパでは、中世から近代へと、ユニークな幾何学的な文化景観——ユークリッド的規則正しさをもつ形態が創造されてきた。その造形原理は、つまりはヨーロッパの造園や建築のそれとも共通するものではあるまいか。

とすれば、日本の文化景観を規定してきた造形原理も、日本の造園史や建築史がさし示す原理と同じものではなかったのだろいか。借景や縮景などにみられる「みたてる」原理、「布石」や「はぶく」手法、視点の固定しない「動く空間」のつかみ方——これらに凝集する造形原理と共通するもの

が、たとえ芸術の世界ほどには洗練されていないとしても、身近かな文化景観のすみずみにまでしみとおっているにちがいない。それがヨーロッパ的なユークリッド的規則正しさでないとするれば、そもそもどんな規則性であろうか。

ここでもういちど、地域の重層的な構造をふりかえてみたい。歴史の中で、いろいろなレベルの生活空間が重層してきた。ムラ人たちが日常の生活や生産にたずさわ「基礎地域」と、市がたち、各地から人や物が集まってくる所謂二次的な生活空間とを、同じ平面の空間とは考えにくい。ましてそれらを包みこむクニ・封建領域・広域都市圏などともなると、「基礎地域」の集合をこえて、支配や管理の機能が浮上してくる。したがって各領域は、相互関連はあるとしても、それぞれ座標系を異にする機能領域とみななければならない。位相のちがう空間を内包する全体としての空間は、まさに高次元の動的な位相空間である。ユークリッド空間は、固定化したその極限状態にすぎない。

昭和四〇年前後から地理学界にも「計量革命」が到来した。しかし、いかに厳密な

計量分析による成果でも、無批判に直交座標のメッシュに投影されるかぎり、空間の貴重な性質は分析過程で消去されてしまう。アプリオリにユークリッド平面をとりだすのでは、身体の振舞い、すなわち行動や機能がえがく深層構造は、数理的にはブラックボックスをでるときがない。

こう考えながら位相数学の五十の手習いを始めて、すでに一〇年近くなる。その地理学的成果は、『地域の構造』（大明堂刊）に詳しい。その成果を、日本の造形原理とどのようにつなぐことができるのであろうか。

六

二〇年代、アルンタ族が自分たちの世界をどう考えて行動したかに興味をもって、『未開人の地図』を『日本史研究』に書いたことがある。ホルドによせる彼等のイメージが、行動の軌跡を強く規定する。そのホルドの構造を、心理学的にトポロジカルと理解しながら、そのトポロジーが、位相数学に対応するとみとおせなかったばかりに、また彼等の心算を特殊と考えすぎたために、実に長い迂路を歩くことになった。ようやく明白になったことだが、景観は

それ自体ユークリッド的であるとしても、われわれが景観、すなわち「身体の延長」の中で行動するとき、さまざまな座標系をもつ行動の軌跡の束は、すべて位相空間的に変換する。上述の諸領域こそ、これらの機能群が収斂するひろがりである。

あたかも身体が生理の表出であるように、行動空間のしくみは、景観要素の「形」にも反映するにちがいない。われわれの行動の中には、「区切る」ことが「結ぶ」ことにつながることもある。それは、例えば家の内外を区切るとともに結びつける濡縁や、聖なる境内と日常世界を分けると同時に近づける神社の鳥居にも具象化する。こうした連続と非連続の同時存在の事例は、ヨーロッパよりも日本に目立つ。ヨーロッパでは、市壁で峻別された都鄙のように、区切るとはAと非Aを二項対立に固定することで、すべては不動のユークリッド空間で処理しやすい。ところが日本人の行動には、表が裏になったり、入口がそのまま出口にもなるメビウスの帯やクラインの壺のようなしくみが少なくない。中世説話集に語られる村境・市・橋・水辺・峠などで生起する霊異も、一般的な行動の深層を象徴的に表現

するものとして、トムの形態発生の特ボロ
ジーによつてはじめてうまく説明できる。

ここで提起したいのは、上述した中世以降の日本の景観を支配する「もう一つの規則性」こそ、日本人の行動がえがきた位相空間のしくみに鋭く対応するものではなかったか、ということである。ヨーロッパにおいて、深層にひそむ位相空間のしくみをあえてたち切り、地上にユークリッドの世界を実現しようとした人工的な造形への憧憬と較べて、日本における歴史景観の奥行きのあるユニークネスを強調したい (The Codes of Japanese Landscapes, Geogr. Review of Japan, No. 1)。

そこには、日本固有のものと中国的なもの、仏教的なものがみごとにとけあっているであろう。測量や建築技術などが示すように、ユークリッド的技法も発達しなかったわけではない。それにもかかわらず、日本における中世以降の景観には、位相空間の数理が色濃く刻まれてきたところに、独自の特徴がよみとれる。日本とヨーロッパだけでなく、さらに中国などの地域構造について、諸言語の構造との対応をも考慮して、今後微細に追究したい。

受贈図書

(一九八五年九月一九日～一九八五年
二月二三日)

城下町和歌山百話 (和歌山市役所市史編纂室)

八幡大学論集 三六巻一号

古代史研究 (立教大学古代史研究会) 四
号

札幌大学教養部紀要 二六号

札幌大学教養部紀要 分冊

東洋文化 (東京大学東洋文化研究所) 六
五号

安沢秀一著 史料館・文書館学への道
(吉川弘文館)

民族研究 四期

史友 (青山学院大学史学科) 一七号

神道史研究 (八坂神社神道史学会) 三三
巻三号

韓国史研究叢報 (SEOUL 国史編纂委員会)
五〇号

日本と韓国の塑像 (飛鳥資料館)

一橋研究 (一橋大学一橋研究編集委員会)

一〇巻二号

龍谷史壇 (龍谷大学史学会) 八六号

岐阜史学 (岐阜史学会) 七九号

神道学 (出雲大社神道学会) 一二七号

住友史料叢書年々張 (思文閣) 無番・一
番

番

駿台史学 (明治大学駿台史学会) 六五号

高円史学 (奈良教育大学高円史学会) 一
号

兵庫史学 (八代学院大学兵庫史学会) 七
一号

号

謝国興著 黄郭興華北危局 (国立台湾師
範大学歴史研究所)

女子短期大学紀要 (札幌大学)

化粧文化 (ボーラ文化研究所) 一三号

鹿児島経大論集 二六巻二号・三号

文理論集 (西南学院大学) 二六巻一号

経済経営論集 (龍谷大学経済・経営学会)
二五巻二号

歴史研究 (大阪教育大学歴史学研究室)

二三号

人文学科論叢 (鹿児島大学法文学部) 二
二号

神道古典研究 (神道大学編纂会) 会報七